定本 種田山頭火句集

大山澄太編

彌生書房刊

定本　種田山頭火句集

初版発行
昭和四十六年十月十五日
六版発行
昭和五十四年八月二十五日
著者　種田山頭火
発行者　津曲篤子
印刷所　猪瀬印刷株式会社
製本所　文勇堂製本工業株式会社
発行所　東京都新宿区中町十八番地
株式会社　彌生書房

0092—71211—8525

定本　種田山頭火句集　目次

草木塔

鉢の子……七
其中一人……二三
行乞途上……三〇
山行水行……三八
旅から旅へ……五四
雑草風景……六三
柿の葉……七六

銃後……九九
孤寒……一〇五
旅心……一二五
鴉……一三四
遍路行……一四〇
一人一草……一五一

自画像

落穂集

行乞道草……一八三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

其中庵便り……二一〇
四国へんろ……二八四
一草庵風景……二九六

層雲集

椋鳥のうた……三一三
父と子……三五七
種田山頭火年譜……三八五
あとがき……大山澄太　三九一

草木塔

若うして
死を　いそぎたまへる
母上の霊前に
本書を
供へまつる

山頭火

鉢の子

大正十四年二月、いよいよ出家得度して肥後の片田舎なる味取観音堂守となつたが、それはまことに山林独住の、しづかといへばしづかな、さびしいと思へばさびしい生活であつた

松はみな枝垂れて南無観世音

松風に明け暮れの鐘撞いて

ひさしぶりに掃く垣根の花が咲いてゐる

大正十五年四月、解くすべもない惑ひを背負うて、
行乞流転の旅に出た

分け入つても分け入つても青い山

しとどに濡れてこれは道しるべの石

炎天をいただいて乞ひ歩く

放哉居士の作に和して

鴉啼いてわたしも一人

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

生を明らめ死を明らむるは仏家一大事の因縁なり
（修証義）

生死の中の雪ふりしきる

木の葉散る歩きつめる

昭和二年三年、或は山陽道、或は山陰道、或は四国、
九州をあてもなくさまよふ

踏みわける萩よすすきよ

この旅、果もない旅のつくつくぼうし

へうへうとして水を味ふ

落ちかかる月を観てゐるに一人
ひとりで蚊にくはれてゐる
投げだしてまだ陽のある脚
山の奥から繭負うて来た
笠にとんぼをとまらせてあるく
歩きつづける彼岸花咲きつづける
まっすぐな道でさみしい

だまつて今日の草鞋穿く

ほろほろ酔うて木の葉ふる

しぐるるや死なないでゐる

張りかへた障子のなかの一人

水に影ある旅人である

雪がふるふる雪見てをれば

しぐるるやしぐるる山へ歩み入る

食べるだけはいただいた雨となり

木の芽草の芽あるきつづける

生き残つたからだ掻いてゐる

昭和四年も五年もまた歩きつづけるより外なかつた
あなたこなたと九州地方を流浪したことである

わかれきてつくつくぼうし

また見ることもない山が遠ざかる

こほろぎに鳴かれてばかり

れいろうとして水鳥はつるむ

百舌鳥啼いて身の捨てどころなし

どうしようもないわたしが歩いてゐる

涸れきつた川を渡る

ぶらさがつてゐる烏瓜は二つ

大観峰

すすきのひかりさへぎるものなし

分け入れば水音

すべつてころんで山がひつそり

味々居

雨の山茶花の散るでもなく

しきりに落ちる大きい葉かな

けさもよい日の星一つ

すつかり枯れて豆となつてゐる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.